

# 中嶋彰子 ソプラノリサイタル

ピアノ：ニルス・ムース

1部	2部
至福 D433 .....シューベルト	女の愛と生涯 Op.42.....シューマン
羊飼いの乙女 D528	1. あの人に会ってから
音楽に寄す Op.88-4 D547	2. だれよりも素晴らしい彼
糸を紡ぐグレートヒェン Op.2 D118	3. 私にはわからない、信じられない
夜と夢 Op.43-2 D827	4. 指につけた指環
歓迎と別れ Op.56-1 D767	5. あの人のお姉様よ手をかして
楽興の時 Op.94 D780より 2, 3, 6 (ピアノ/ソロ) .....シューベルト	6. やさしい友よ、君の眼差しは
女声のための6つの歌より <ねずみとりの呪文> .....ヴォルフ	7. 私の心に、私の胸に
メーリケ歌曲集より <世をのがれて>	8. いまあなたは最初の悲しみを私に与えた
たそがれの夢 Op.29-1 .....シュトラウス	4月.....トスティ
セレナードOp.17-2	理想の人
「ヴェーゼンドンクによる5つの歌」より <夢> .....ワーグナー	別れの歌
	さよなら

秋

## 2009 四季コンサート

2009年10月29日(木)6:45PM

会場：浜松市教育文化会館

主催：浜松音楽友の会

### プロフィール

#### 中嶋彰子(ソプラノ)

90年全豪オペラコンクール優勝。同年、シドニーとメルボルン、両オペラハウスと契約後『皇帝ティートの慈悲』のセルヴィリアでデビュー。92年、サン・カルロ劇場『ラ・ボエーム』のムゼッタでヨーロッパデビュー。同年インスブルック国際バロック音楽祭のヘンデル『アルチーナ』のタイトルロールでヨーロッパ国際放送連合92年度最優秀賞受賞。99年ダルムシュタット・オペラ『ルチア』のルチア役で「オペラベルト」誌年間最優秀新人賞に選ばれる。同年ウィーン・フォルクスオーパー専属歌手となり、劇場のトップスターとして圧倒的な人気を獲得。近年はハンブルク州立歌劇場デビューや小澤征爾、ズービン・メータ、シャルル・デュトワとの共演など益々活躍の場を広げている。最新盤『Plaisir D'amour～愛の喜び』まで3枚のCDをリリース。第14回「出光音楽賞」受賞。シュタイヤー音楽祭アーティストティック・アドバイザー。

<http://www.akiconakajima.com>

#### ニルス・ムース(ピアノ)

デンマーク王立音楽院、カリフォルニア州立大学で指揮を学ぶ。92年より99年までインスブルック・チロル歌劇場第一指揮者を務める。99年ランゴアの歌劇『反キリスト』をドイツ語で初演、そのCDは数々の賞を受賞している。99年より03年まで、ウィーン・フォルクスオーパー正指揮者兼キャスティングディレクターを務めたほか、これまでベルリン・フィルハーモニー・ホール、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス、サンタ・チェチリア・アカデミー等に客演。TDK、ドイツ・グラモフォン等からCDリリース多数。



中嶋彰子  
ソプラノリサイタル



AKIKO NAKAJIMA  
SOPRANO RECITAL

●フランツ・シューベルト(1797~1828)／

至福 D433 羊飼いの乙女 D528 音楽に寄す Op.88-4 D547

糸を紡ぐグレートヒェン Op.2 D118 夜と夢 Op.43-2 D827 歓迎と別れ Op.56-1 D767

歌曲王とも呼ばれるシューベルトは、595曲に上る歌曲を残した。それは「美しき水車小屋の娘」、「冬の旅」、そして「白鳥の歌」などの連作歌曲集を初めとして、いずれもが感情の繊細な変化を豊かに表現している。

「至福」は、ヘルティの詩によるホ長調、3/8拍子のワルツで1816年5月の作。「羊飼いの乙女」は1817年作のゴールドーニの詩によるアリエッタ。「音楽に寄す」は親友ショーパーによる詩で、純粋に芸術への憧憬を歌った極めて感動的な作品である。「糸を紡ぐグレートヒェン」はシューベルト7歳の作品で、詩はゲーテの「ファウスト」から採られている。1825年に作られた「夜と夢」は、コリンの詩によって通作形式で書かれ、夢に溶けていくような美しい旋律が印象的だ。そして1822年作の「歓迎と別れ」は、ゲーテの詩によっている。

●フランツ・シューベルト／「楽興の時」Op.94 D780より (ピアノ・ソロ)

2.アンダンティーノ 変イ長調 3.アレグレット・モデラート ヘ短調 6.アレグレット 変イ長調

性格的小品の最高峰に位置する作品のひとつである。6曲で構成されているが、成立年代は同時ではなく、また経緯も明らかではない。例えばもっとも知られている、かつて「ロシア風エール」と題されていた愛らしい「第3曲ヘ短調」は1823年12月に作曲されているが、コラル風の「第6曲変イ長調」の完成は翌年12月である。いずれにせよ1827年7月には特徴的なリズムの「第1曲ハ長調」、伸びやかな「第2曲変イ長調」、即興的な「第4曲嬰ハ短調」、そして躍動的な「第5曲ヘ短調」がまとめられて出版された。

●ヒューゴ・ヴォルフ(1863~1903)／女声のための6つの歌より <ねずみとりの呪文>

メーリケ歌曲集より <世をのがれて>

ヴォルフは、ワーグナーに強い影響を受けた後期ロマン派の作曲家である。器楽曲もわずかにあるが、その創作の興味は殆ど歌曲に向けられた。「女声のための6つの歌」は、友人たちの尽力によって1888年に出版された歌曲集で、当時17歳であったヴォルフにとつての処女出版でもあった。その第4曲が「ねずみとりの呪文」である。リート作曲家の中でも異彩を放つヴォルフが、1888年から2年間ほどで約200曲の歌曲を書いたが、その手始めに完成したのがメーリケの詩による53曲の歌曲集。その第12曲が「世をのがれて」で、ヴォルフの作品中もっともよく知られた曲でもある。

●リヒャルト・シュトラウス(1864~1949)／たそがれの夢 Op.29-1 セレナード Op.17-2

後期ロマン派を代表する作曲家、リヒャルト・シュトラウスは、主に重厚な交響詩やオペラを書いたが、一方で清冽な抒情を込めた歌曲も多く残している。「たそがれの夢」は、1864年から翌年にかけて作曲された「3つの歌」の第1曲目で、嬰ヘ長調、2/4拍子。ビーヤバウムの詩によっている。夫人が外出するための支度を待つ15分ほどの間に作曲されたと伝えられており、ゆるやかな抒情が漂う。シャックの詩によって書かれた魅惑的な「セレナード」は、イタリアに旅行した1886年に書かれ、南欧の明るい官能が見事に表現されている。嬰ヘ長調、6/8拍子。

●リヒャルト・ワーグナー(1813~1883)／「ヴェーゼンドンクによる5つの歌」より<夢>

ワーグナーの演奏に感銘した富豪ヴェーゼンドンクは、所有していた別荘をワーグナーに提供した。その頃ワーグナーは楽劇「ジークフリート」を作曲中だったが、中断して楽劇「トリスタンとイゾルデ」の創作に没頭、またヴェーゼンドンク夫人マティルデと愛し合うようになる。そのマティルデの詩によって1857年~58年に書かれたのが歌曲集「ヴェーゼンドンクによる5つの詩」で、「夢」は第5曲。ワーグナーはこの旋律を「トリスタンとイゾルデ」第2幕の「愛の二重唱」に用い、自身の気持ちを反映させている。

●ロベルト・シューマン(1810~1956)／女の愛と生涯 Op.42

シューマンの創作は、作品1から23まですべてピアノ曲である。それはすべてクララのためであったが、いざクララとの結婚が現実のものとなった1840年、シューマンの興味は歌曲へと向かう。そしてその年、この作品を含む100曲以上の歌曲が誕生した。もともとシューマンは文学作品に強く影響を受けており、詩と音楽の融合、そしてピアノとの調和はいずれも類を見ない高度な芸術へと昇華しているのである。

この作品は全8曲からなり、娘時代の恋愛から結婚、出産、そして未亡人となる女性の生涯を取り上げたシャミッソーの詩によっており、ひたすら愛に生きた女性心理を見事に描写している。

●フランチェスコ・パオロ・トスティ(1846~1916)／4月 理想の人 別れの歌 さよなら

声楽教師をしながら作品発表をしていたトスティは、やがてロンドンで成功、ヴィクトリア女王の王室付音楽教師としても活躍した。人々に愛された多くの歌曲の創作に対し、男爵を授けられてもいる。「4月」は、リッアラの詩によるハ長調、6/8拍子の軽快な曲、エリーコ・の詩による「理想の人」は、去っていった恋人への想いが切々と歌われる。ダロケールの詩による「別れの歌」は、極めてロマンティックな哀感が切々と胸に迫り、ホワイト＝メルヴィルの英詩による「さよなら」は、情熱的な中間部からドラマティックに結ぶ。